

日本キリスト教会大阪北教会

2016年12月25日 クリスマス礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書3章16節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

聖書 ヨハネによる福音書1章14節～18節

14言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。15ヨハネは、この方について証をし、声を張り上げて言った。「『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。」16わたしたちは皆、この方の満ちあふれる豊かさの中から、恵みの上に更に恵みを受けた。17律法はモーセを通して与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。18いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。

《説教》『この上ない神様からの贈り物』

◆今日、2016年のクリスマスの日を迎え、このように共にお祝いできることを嬉しく思います。今日のこのクリスマスが皆さんにとって生涯忘れることのできないものともなってくればと、強く願います。それは今日の週報にありますように、第1部が礼拝、第2部が藤城清治氏の影絵、第3部が祝会となっております。どの部分でもいいのですけれども、「あー、今日は来てよかった」と、そのように思える部分との出会いがあればと思います。小さな出会いの経験が、わたしたちの人生の方向を変えることがあるからです。

◆と申しますのは、今から60年以上も前になりますが、私が中学3年の時、クラスメートが昼食の後教室で今まで聞いた事もない珍しい歌を歌ったのです。12月の初めだったのです。それは「あら野のはてに」という賛美歌です。昔の106番、今の263番ですね。私は初めて聞いた歌だったものですから、「西岡、その歌、なんや？」と聞いたのです。「これ賛美歌やで、教会で教えてもうてん」と言います。「ふーん、そんなら、僕も教会につれてって」と言って、次の日曜日から大阪西教会に行くようになったのです。もう60数年前のことです。そして今に至っています。

◆私は今このように皆さんと御一緒にクリスマスの礼拝を守っていますが、もしあの時、教室で西岡君が「あら野のはてに」を歌わなかったら、このような今日の日はなかったからです。ですから今日わたしたちがみなこのように一緒にいるということは、教会の人もいるし、教会の人に誘われて来た人もいるでしょうし、いろいろですけれども、本当にわたしたちが今・ここに、一同に会しているということは、よくよく考えてみると、これは奇跡的なことですね。皆さんも人生の中で、あの時、あの出会い、経験がなかったら、ということがおありですね。今日来られたのも、お友達に誘われてという方もあると思います。それなら、そのお友達と、

いつ、どういう風に出会われたかと、それをずーっと遡っていくと、決して単純な経過ではありませんね。そんなこと考えますと、私たちが今・ここにいるということは、本当に奇跡的なことなのですね。

◆もしこの教会に出会わなかったら、自分はその時、自ら命を絶っていたかも知れない。そういう思いを持っておられる方もあるかもしれません。そのようなことでありまして、わたしたち一人一人の人生というものは、これは代わりがないのです。そしてこの私の人生は本当になんとも形容のしようがないほどに固有です。今日の説教の題は「この上ない神様からの贈り物」としましたけれど、本当にこの上も、この下もない固有の私の存在なのですね。そういう自分なのだということを、ここにいる自分のこととして、そして隣に座っている人の事として覚えておきたいと思います。互いに本当にそういう存在なのですね。新潟県の糸井市で大火事がありましたね。そういう年末もあります。焼け跡もすぐ片付けられて、自分の家に行く事ができました。あれがもし原発事故ならば、もうしばらくどころか、いつまで経っても自分の生れ育った所に帰れないことになります。それは比較することではありませんけれども、このような経験は人生にはあることです。いいことばかりではありません。

◆けれどもこういう所を通して、私たちの今があるわけです。ですから自分を大事にし、家族を大事に、身内を大事にし、友人を大事にし、慈しむ。それが、神様が、神様の独り子であるイエス様が身をもってわたしたちに示してくださった御心なのです。今、司会者が聖書を二か所読まれました。「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』『独り子』というのは兄弟姉妹がないわけです。神様から生まれたのはキリストだけだと言っているわけです。ほかにキリストに比べるような者はいません。けれども神はその独り子をさえわたしたちの為に下さったのだ。それを神様の愛というわけです。そしてそのキリストはわたしたちのために命をなげだしてくださったのですね。

◆聖書によれば、イエス・キリストはまだ結婚していない処女の MARIA からお生まれになりました。このようなことは、過去の歴史にはありません。必ずお父さんとお母さんがいて、また男の人と女の人がいて、その間に子どもが生まれるのです。しかし、キリストの場合は、MARIA には婚約者ヨセフがいたのですが、まだ結婚する前に MARIA が身ごもったのです。それでヨセフはものすごく苦しむわけですね。自分は知らないのに、婚約者の MARIA が妊娠したのですから当然です。大変な経験をしているわけですね。ところが、MARIA は、何か悪いことをしたような気配を全くうかがわせないのです。マタイ伝の 1 章にこう記されています。「ヨセフは正しい人であったので、MARIA のことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。 01:20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ、恐れず妻 MARIA を迎え入れなさい。MARIA の胎の子は聖霊によって宿ったのである。 01:21 MARIA は男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。』 01:22 このすべてのことが起こった

のは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった」と。ヨセフは天使のお告げを真に受けて、マリアを妻に迎えることになったのです。そういう次第で、この事を「処女降誕」と言います。これはまさに奇跡なのです。

◆皆さんもごらんになったかもしれませんが、12月8日と21日にNHKで“ファミリー・ヒストリー”という番組がありました。倉本聰さんとビート・たけしさんでした。当人も知らない先祖の物語が明らかにされて行きます。この番組を制作するのにNHKはものすごい量の取材をします。時には本人も3代くらい前のこともよく知らない事があるわけですが、取材した資料を編集して、一つのドラマに仕立てるのです。それぞれの先祖をたどり、“ファミリー・ヒストリー”を45分のドラマにするわけです。本人も驚くような事が、出て来ます。なかなか面白い番組です。

◆それで只今、聖書を2か所読んでいただきました。最初のヨハネ3章16節は有名な箇所、あのマルティン・ルターが、この箇所を「小さな聖書」と呼びました。

「これが聖書のエッセンスです」という意味です。ところがもう1箇所、後で読んでいただいた14節～18節ですが、これを聞かれて、「すごいなあ」と思われた方があるならば、本当に感性が鋭く、すごい読解力です。私はこの箇所を60年以上読んでいますけれども、ようやく最近になってその奥深さが分ってきたところです。というのは、ここに「ヨハネ」という人が出てきますね。ヨハネはここでキリストについて証をしています。<ヨハネは、この方について証をし、声を張り上げて言った。『わたしの後から来られる方は、わたしより優れている。わたしよりも先におられたからである』とわたしが言ったのは、この方のことである。』何を言っているかお分かりになりますか。ヨハネとキリストとは親戚です。ヨハネは6か月前に生まれました。そして他人は知らなくても、親戚ならば知っているという事が沢山あります。ところが親戚であるヨハネが「わたしの後から来られる方はわたしよりすぐれている。わたしより先におられたからである」と言います。また18節では「いまだかつて、神を見た人はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである」とも言います。キリストだけが神を示したと言うわけです。

◆それで、今このヨハネ福音書の最初の所は分かりにくいですが、この福音書の最後にはこのようなことが書かれております。「イエスのなされたことは、このほかにも、まだたくさんある。わたしは思う。その一つひとつを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう。」それこそ、イエス・キリスト御一人の生涯を取材しようとしてもそれは無理だ、不可能だと、言っているのです。「キリストはそれほど大層な人物なのか」と思われる方があるかと思いますが、私は、本当に大層な御方だと思います。それだけではありません、今回、私は、主イエス・キリストについて、確かにそうだろう。しかし、それならば、この森田幸男という男があるがままに、有体に、そのヒストリーをすべて書いたものがあるとするならば、正にイエス・キリストと同じくらい世界もその書いたものを収めきれないと思いました。そうではないでしょうか。それ位、わたしたち一人一人の存在は、自分も他人も知らないことが無限にあるわけです。実に、途切れることのない先祖の連続があ

って、私が、今・ここにいるのではありませんか。ですから、私たちが、今・ここにいるというのは、ある意味、奇跡の連続なんですね。そういうことですので、聖書をたてまつらないで、身近な人のヒストリーと思って読んでいきますと、聖書が記している事は、本当に有難い事なのですが、有難い人間のリアリティーといえますか、本当に人間のことを書いているのだ。その事を本当に真剣に書いているのだという事が段々分かってきます。そうなるに聖書というのは面白い本になりますね。

◆それで「クリスマス」はキリストの誕生を祝っているわけですが、「クリスマス」とは、実は「キリストを拝む」ということです。直訳すると。ですから、皆さんは、今日、大阪北教会に来たばかりに、キリストを拝まされているのです、しかし、本当に私たちが心から拝むというのは、拝むほかないと気づく時ですね。そしてこの「拝む」という言葉には「解放する」という意味もあります。キリストを本当に心から拝むようになる時、わたしたちには、過去の後悔、これからどうなるという不安もありますね。けれども、キリストを拝む時、わたしたちはそれらを持ちながらも、解放され、わたしたちは、自分の将来に何が起るかわかりませんが、それでもキリストを賜った神様の愛が常にわたしに向けられている。この事実は、何があっても崩れない。私たちが様々な恐れや不安があっても、それらから解放されるのです。ですから、クリスマスを、年に一度、12月25日だけにしないで、毎日を「クリスマス＝キリストを拝む」日として過ごされるならば、段々に聖書の人物とこの私が近付いて来ます。聖書が言っていることが我がものとなります。

◆それで今年も頂いたクリスマスカードの中に、本当に嬉しいカードがありましたので、皆さまに御裾分けいたします。北海道の方です。このようにあります。「主イエス・キリストのご降誕をお祝い申し上げます。嬉しいときも、悲しいときも、主の助けに支えられて感謝です。喜びをもって主のご降誕の日を迎えます。」当たり前のように聞こえるかもしれませんが、この方がこういう風に見える迄に30年かかっておられます。お嬢さんの事で苦しまれて、この子と一緒に死んだ方が楽だと思われるような所を通してこられての今年のクリスマスです。「主イエス・キリストのご降誕をお祝い申し上げます。嬉しい時も悲しい時も主の助けに支えられて感謝です。喜びをもって主のご降誕を迎えます。」今お嬢さんと一緒に教会へ行けるようになりました。お二人共、苦しみ悲しみから解放されたのです。

◆お祈りいたします。

愛に満ち給う主イエス・キリストの父なる神様。

今日このように皆さんと一緒にクリスマスを祝うことができ感謝いたします。時にあなたの為し給うことは、わたしたちの思いをはるかに超えています。しかし、あなたの善き御顧みは途絶えることはありません。そのことを新たに覚え感謝いたします。どうかわたしたち、自分自身を、そしてすべての人、一人一人を、かけがえない存在として、互いに慈しみつつ生きる日々であらせてください。世界中が、世界の人々が、互いに慈しみ合って暮らす日々を回復できますよう心からお祈りいたします。この祈りイエス様の御名を通し御前におさげいたします。アーメン。